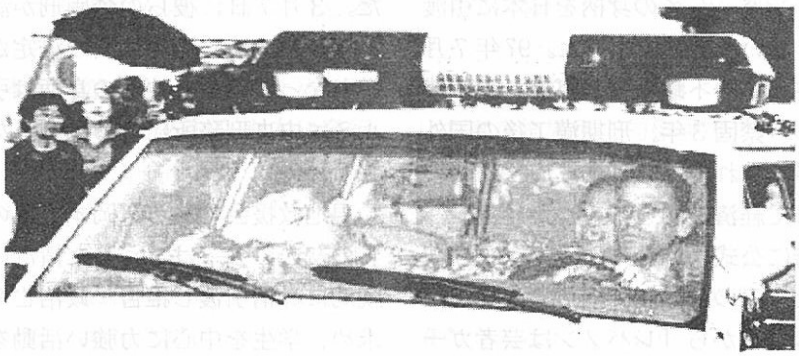
ザ☆パスポート



ルミエ刑務所から出る岡本さん

岡本さんのパスポート

帰国者の裁判を考える会

THE PASSPORT

2000.4.1 No. 91

The Supporting Association for Trials of the Returnees(JRA concerned)

日本赤軍４人の強制送還、岡本さんの孤立化へ抗議する！

帰国者の裁判を考える会

３月１日（水）、レバノンの閣議は「日本赤軍メンバー５名の身柄を日本に引渡さない」という結論を出した。97年７月31日、ベイルート地裁でレバノン不法滞在に対し「禁固３年、刑期満了後の国外退去」が出されてから日本政府はこれまで一貫して経済援助をちらつかせ、レバノン政府に公式・非公式に圧力をかけ続けて来た。その執拗な身柄引渡し要求は現地マスコミから「レバノンは芸者ガールではない！」（金でアラブ・パレスチナの大義が買収出来ると思うな！　レバノン人を舐めるな！）と非難を浴びせられてきた。

2000年に入り、こうした執拗な圧力は更に強められていった。アドゥム検事総長は２月７日にシャウール司法相に身柄引渡しに関して司法判断をまとめた意見書を提出した。その内容は、日本政府は、日本とレバノンの間には犯罪人引き渡し条約がなく、彼ら５名の罪状がいずれもすでに10年以上経過しており、レバノン刑法では裁くに値せず、それをもって身柄引渡しを行う素因にはなし得ないと身柄の引き渡しを拒否するものであった。レバノン政府はこうした司法見解を尊重し、身柄引き渡しの拒否を決定したのだ。

にもかかわず、日本政府は更に強引に小渕首相特使や駐レバノン・日本大使である堀口松城を交渉役とし、ラッフォード大統領・ホス首相・ムール内相などレバノンの閣僚と再三に渡り折衝させてきた。３月７日、彼らの禁固刑が満期を迎えたが、政治亡命委員会の決定が継続討議となっており、彼らの身柄は引き続きルミエ中央刑務所に留め置かれた。

現地救援会である”岡本と彼の同志たちの友人の会”はこうした情況の中、継続的に身柄引渡し拒否・政治亡命実現を求め、学生を中心に力強い活動を展開してきた。ベイルート市内の内務省付近では、「五人に政治亡命を与えよ」と訴え、約20人が６日から座り込みのハンガー・ストライキを続けた。

首相小渕は17日夜、首相官邸に警察庁の金重凱之警備局長を呼び、５人の身柄引き渡し問題を協議。

３月17日（金）、ルミエ中央刑務所の足立正生さん、戸平和夫さん、和光晴生さん、バァーブダ女性刑務所の山本万里子さんの房に「他に移るから10分以内に荷物をまとめろ」と看守が呼びかけた。岡本公三さんだけは房に残された。

彼らは刑務所を出た所で後ろ手錠に目隠しをされ、男性３名は手錠をロープで繋がれ、「後ろ手スクラム」という状態でベイルート空港に連行され、そのままの状態で両脇を抱きかかえられ機内に押し込められた。ベイルート国際空港を飛び立った中東航空（ＭＥＡ）機は、隣国ヨル

ダンのアンマン国際空港へ向った。レバノンの「国外退去」はこのように行われた。

数時間後、ＭＥＡ機はヨルダン・アンマン国際空港に着陸。そこに待機していた日本政府のチャーター便（アエロフロート・ロシア航空機）が彼ら４名を搭乗させた。彼らは搭乗前、レバノンへの帰国をヨルダンの出入国管理官に意思表明したが拒否された。搭乗に際し在アンマン・日本大使館から「帰国のための渡航書」が全く本人たちの知らぬ内に発行された。１８日（土）午後５時１８分に成田空港に着陸。そして逮捕された。

現地マスコミに”隠密作戦””秘密取引”と報じられた「強制送還」が明らかに国際法違反であることは、警察庁外事課・内山田邦夫が警察庁内で同日午後６時20分から行った記者会見で自ら「移送過程や具体的な作戦経過はこの場では言えない」と発言し、違法行為を認めたことで明白です。外務省・警察庁は違法な「強制送還」から「逮捕」に至る過程の詳細に関し、その後も一切口を閉ざしたままです。

小渕首相は「18日にテロリストの住む場所は世界中どこにもないということを証明した結果だ」と語り、「岡本の身柄引渡しを引き続きレバノン政府に対し求めていく」と更にレバノン・アラブ人民に敵対する行為を続けていくことを宣言した。駐レバノン・日本大使の堀口は早速、ホス首相に岡本の身柄引渡しを求め断られている。

岡本さんは21日午後、レバノン史上初の政治亡命を勝ち取った。政治亡命を認められ、滞在証を手にした岡本さんは1972年リッダ闘争に対してイスラエル軍事法廷で無期懲役の判決を下されて以来、ジュネーブ条約に基づくパレスチナとイスラエルの戦争捕虜交換で1985年、イスラエルの刑務所から解放されるまでの13年間、肉体的精神的な拷問を受け続けてきました。今後、岡本さんをあらゆる面で支え、執拗な日本政府の身柄引渡し要求を跳ね除けていくことも継続的に問われます。

現在、警視庁に勾留されている日本赤軍メンバー３名（足立さん・山本さん・和光さん）は勾留・取り調べとの闘いを、そして東京拘置所で勾留中の戸平さんは獄中闘争を続けています。和光さんはオランダ・ハーグの仏大使館占拠闘争での殺人未遂や逮捕監禁容疑、足立さんはチェコスロバキア（当時）に偽造入国許可申請書で入った偽造有印私文書行使容疑、山本さんは他人名義の旅券を取得した有印私文書偽造容疑などでそれぞれ逮捕されましたが、３人とも容疑について黙秘し元気に頑張っています。

20日午前、東京地裁は10日間の勾留を認めました。29日、更に10日間の延長が認められたとしたら、４月７日が勾留期間の満期となります。

我々は皆様と共に、彼ら４名を孤立させず、外からの差し入れで励まし、弁護士の接見で支え、ねばり強く国家権力による弾圧を跳ね返す闘いを続けます。そしてレバノン・アラブ・パレスチナの人々と連帯し、岡本さんを支え日本政府の身柄引渡し要求を跳ね除けていきます。

一つ一つ小さな勝利を積み重ねていく闘いには、より多くの人々の応援・ご支援が必要です。

日本赤軍声明

ベイルート４の強制送還後送られてきた日本赤軍からのメッセージです。

３月17日、レバノン政府の政治亡命委員会は、岡本同志の政治亡命を認めると共に、他の日本赤軍同志に対して追放を決定しました。

1 私たち日本赤軍は、日本政府の経済制裁の執拗な攻撃にさらされながら、３月１日の送還拒否を決定した事に続き、岡本同志の政治亡命を認めたレバノン政府の決定を評価します。しかし同時に、４同志の追放が日本政府のシナリオによっているとは言え、アラブの一部の反動勢力との共同によって日本への追放に結果した事に抗議します。
レバノン政府の送還拒否、岡本同志亡命許可決定は、ひとえに、日本赤軍５同志支援の人々のたゆみない戦いによって勝ちとられた成果としてあります。私たち日本赤軍は、レバノン人民、弁護士、政治家、解放組織のたゆみない救援と連帯にまず全同志の名において心から感謝します。

帝国主義勢力のグローバルな経済支配の現時代にあって、全同志に対する亡命を許容する条件が無いことを私たちは理解しています。むしろこうした時代にあっても、強力な人民支援の力で、正式な「送還」を阻止しつづけた、人民連帯の勝利をこそ誇るべきだと考えています。

2 日本政府は卑劣な手段でアラブ人民に敵対しつづけています。イスラエルの攻撃にさらされたレバノンの困難な経済状態につけ入り、送還を拒否された後も、アラブの団結、大義、主権を踏みにじってアラブ諸国を揺さぶり続けてきました。日本政府の姑息な動きは岡本同志と４同志を引き離し、送還拒否決定にも関わらず、経済援助を餌にアラブの反動勢力を利用して、「追放」のシナリオを描き、４同志を強制的に日本に拉致しました。アラブの歴史の中に、一方にはリッダ闘争の人民の連帯と、もう一方に金と虚言でアラブ政府、人民を愚弄した日本政府の犯罪が新に刻まれました。
私たち日本赤軍は、そしてレバノン、アラブ人民は、こうした愚弄と暴挙を決して許さないし、決して忘れないでしょう。

3 岡本同志は、今亡命を許可され、しかし、隊伍を引き離され、ただ一人孤立した条件に置かれようとしています。イスラエルの獄中で受けた後遺症は、一人での生活を難しくしています。どんなになつかしい同志であっても、岡本同志と共に過ごす事が日本赤軍の私たちには許されません。岡本同志を帰国せざるを得ない状況に追い込む事、日本政府はそれをこそ望んでいます。私たち日本赤軍は、レバノン人民、友人達の支援と、日本人民、友人達の救援を引き続き願うものです。

4 私たち日本赤軍は、いつ、いかなる条件下にあっても、人民の戦いを共にし、戦場がどこに変わろうとも戦い続けます。４同志の帰国は、逆に日本での新しい戦いの始まりとして位置しています。

アラブ人民と共に、リッダ闘争の歴史の上に築かれた遺産を今、私たちはしっかり握りしめています。一つはリッダ闘争戦士達、アラブの先達が築いた「人々の為に労苦も命も厭わない」自己犠牲の精神です。そしてもう一つは、その自己犠牲によって築かれた徹底したヒューマニズムの人民の国際連帯です。この、世界の人々と共に築いた二つの遺産を握りしめ、人間に対する愛と希望を育み合う政治がある事を人民連帯としてこれからも育てます。私たちは歴史的遺産を継承し、日本人民の闘いに依拠し、世界の正義と公正を求める人民勢力の一部として、アラブの地での戦いの教訓を生かし、日本の地においても人民の戦いと共に進みます。引き裂かれた条件にあっても人民連帯は不滅に輝き、新しい世紀の希望の萌芽を築きつづけることを確信します。共に。

ウナディコムの皆さんへ

2000年3月3日 ベイルート5を代表して、足立正生

日付のとおりこのメッセージは、日本への強制送還前にレバノンから出されたものです。その後、ベイルート5を取り巻く状況は大きく変わりました。
しかし現在でも、このメッセージが書かれたときとその心意気は何一つ変わらず、相変わらず元気に闘っているところです。

皆さん！　日々、私たちの支援の努力をしてもらって、本当に頭が下がります。今日は、わたしたちの事件で偉大な発展があったのでお知らせします。レバノンからのニュースで既にご存知とは思いますが、3月1日に、レバノン政府が対日強制送還要請を拒否しました。レバノン政府が、私たちの件に関する特別委員会の研究結果を受理した後に、「日本側へ5名を引き渡すに足る十分な司法上の根拠がない」、つまり、引渡しはしないという結論に至ったからです。

この偉大な一歩は、30年以上もイスラエルの占領に対するレジスタンスを闘ってきているレバノン人民と政府の国民的コンセンサスによるものだと、私たちは信じています。レバノン人民・政府のこの偉大なコンセンサスは、民主的レバノン発展の最大のエネルギーです。このコンセンサスがあればこそ、主要には日本が目論んで来た陰謀がもたらしたであろう最悪事態は回避できたと考えているのです。

という訳で、私たちは、まずもって、レバノンの全人民と政府に感謝しています。次に、日本ではウナディコム、レバノンでは「オカモトと彼の同志たちの友人委員会」など、日本とレバノンの人民が多大な努力と活動をしてくれたおかげだと感謝します。この二つのグループが具体的な支持と支援とで連帯してきたおかげもあって、私たちは健全な獄中生活を送ってこれたのですし、対日強制送還のハードルを越えることもできました。

現在、私たちは自由になる日を目の前にして、次の、そして最大のハードルに直面しています。そう、全員が政治亡命をかちとるというハードルです。ですから、更なる支援を要請する訳ですし、特にレバノン人民との連帯強化をお願いします。小渕首相が厚顔無恥にもレバノン人民に敵対する態度を変えず、日本当局と官憲は、レバノンの国民的コンセンサスと愛国主義とに対する陰謀を継続的に仕掛けてきたが新たにまた仕掛けようとしており、どんな汚い政治的手練手管を弄してきたかを反省もせずに、悪意の政治経済的政策をとり続けているのです。

獄中で結婚式にのぞむ足立正生さん。

現在、ここレバノンでは、毎日、爆撃と砲撃を受けていて、全レバノン人、政府、戦士たちは、「レジスタンス闘争、万歳！」「イスラエル占領者どもと奴等の同盟者どもをやっつけろ！」の掛け声のもと、一致して闘っています。日本政府が「新植民地主義者日本をやっつけろ！」とレバノン人民に言われる日が来ないことを、私たちは望みます。あなたたちだけが、レバノンの人々との人民連帯をおし進めて、もっと本音の関係を作って、そうした悪い状況にならないようにすることができる、私たちはそのように確信しています。

占領者と陰謀を企む者に対するレバノン愛国主義、万歳！
日本・レバノン人民連帯、万歳！
日本政府の腐敗した反中東政策を打倒しよう！

小さな勝利から大きな勝利へ！

2000.03.24　丸岡修

日本赤軍の獄中メンバーを代表して、 私個人の責任で表明します。（東京拘置所不当在監）

1.

３月17日、レバノン政府は岡本同志の政治亡命を承認し、残る足立同志ら４名をヨルダンへの国外退去としました。４名はヨルダンで日本側当局のチャーター機に乗せられ、実質的には「強制送還」になりました。この方法と追放先がヨルダンであることは、私たち日本赤軍が予測していた範囲であり、それほど驚く事態では全くありませんでした。大きくはないが小さな勝利であるのです。

なぜなら、レバノン政府が３月１日に、日本への直接的引渡しを正式に拒否したことにおいて、政治的勝者は私たちであり、敗者は日本政府であったからです。司法当局の見解は、「日本政府からの引渡し要求が政治的動機によるものであれば認められない」（検事総長）というものでしたし、最終的には「引き渡す法的根拠はない」というものでした。司法当局の結論がそのまま政府の決定となりました。それがただの建前であろうとも、日本の経済力を背景にした恫喝と米国からの政治的圧力の前で、正式に「引渡し拒否」を決定したことに意義があるのです。実質的には16日後に日本への送還に４同志はなりましたが、岡本同志の政治亡命が認められたことは、勝利以外の何物でもありません。

帰国させられた４名ですが、足立同志ら３名は、日本によって海外で非合法化されたままの理不尽な状態であるよりも、日本への帰国を堂々と果たし、仮に「有罪」になっても長くて３年程度の刑を終えれば、合法的身分を獲得出来る方が私たちには利益があります。投降によるものではありませんし。デッチアゲ容疑で重刑弾圧が予想される和光同志の政治亡命を実現できなかったことは、私たちの負けではありますが、裁判が負けると決まった訳ではありません。

５名全員の政治亡命という完全勝利は得られませんでしたが、現在の国際情勢下で政治的勝利と岡本同志の日本引渡しを阻止したことは、私たちが最小限の勝利を得たことを意味します。日本政府とマスコミがいくら口汚く私たちを罵ろうとも、リッダ闘争が示した「自己犠牲と国際主義の精神」は、何億ドル（水源・環境プロジェクトに1.2億ドル、内戦復興プロジェクトに１億ドル）と日本政府が金を積み上げても（ヒモ付・利子付の貸与金でしかないが）、決して揺らぐことはないのです。いくらリッダ闘争を「無差別テロ」と非難しても、アラブの大義と人民連帯に殉じた戦士たちの名誉を傷つけることはできないのです。

2.

ソ連型社会主義の崩壊以降、世界は、米国を中心とするいわゆる「先進資本主義」諸国（＝帝国主義）の一元支配にあり、各国の主権は踏みにじられ、民族解放闘争や人民の革命運動が個別に抑圧される情況にあります。前進と後退、進歩と反動を繰り返しながら発展する歴史の中では、社会主義と資本主義の攻守は度々入れ替わります。その一時的後退期に80年代後半から入っていますが、その国際情勢下で革命政権でも反米政権でもないレバノンが一国だけで、米国や日本などが一体となった西側陣営の圧力に抗することは不可能であり（シリアやリビアのような反帝の進歩的政権であっても）、実際には、５同志全員が３年前に日本に引き渡されても不思議はない情況にはあるのです。そのレバノンが、裏の手を使ったとは言え、表向きは公的に５人全員の日本への直接的引渡しを拒否したことは、私たちが国際人民連帯としてアラブの地に播いた種が実を結び、根をしっかりと張ったことを示しています。

3.

レバノン政府の引渡し拒否と岡本同志亡命承認は、最初から最後まで5同志の支援に、「オカモトと彼の同志たちの友人の会」を中心に立ち上がった学生、市民、弁護団、国会議員、政治勢力を初めとするレバノン人民の力によったと断言できます。深い感謝の念をレバノンの人民、諸勢力に表明します。

パレスチナ解放勢力、アラブ諸国人民の応援もまた、大きな力になりました。

人民の連帯の勝利と言えるでしょう。

4.

日本政府は性懲りもなく、政治亡命が認められた岡本同志の日本への拉致を企てています。そもそも日本が岡本同志を「殺人罪」で国際手配することは間違っているのです。アラブとイスラエルの戦争情況下での軍事作戦であり、そして岡本同志の釈放は、「超法規」によるものではなく、国際赤十字とオーストリア政府が仲介した、戦争捕虜の交換としてありました。国際法ではこの時点で、他のアラブ人戦士たちと同じく岡本同志は完全自由の身です。日本国籍の彼に旅券を交付すべきであったのです。岡本同志が本来は自由の身である証拠に、イスラエルは「身柄収監状」も出さず、国際手配もしていません。イスラエルは72年、リッダ闘争を刑事事件として扱わず、岡本同志を軍事法廷に回しました。彼を特別法で死刑出来たのにもかかわらず、無期の禁固刑にしました。

日本が横から介入して、日本国憲法の第39条(一事不再理・二重処罰の禁止)に違反して岡本同志を手配し、日本の裁判にかけ死刑にすることは許されないのです。アムネスティ・インターナショナル(英国本部)は、死刑反対の立場から岡本同志の引渡し反対の意向を表明しています。

日本政府は直ちに岡本同志に対する逮捕状請求を取り下げよ!

5.

4同志たちの"帰国"は私たちにとって、終わりではなく、日本国内での新たな闘いの始まりを意味しています。

私たちは、日本人民の反戦平和と民主主義を求めてきた闘いの歴史を継承し、人間主義に基づく民主主義が徹底化された社会(真の社会主義)の実現に向けた闘いを発展させていきます。

小さな勝利から大きな勝利へ! 新時代の新しい闘いを共に! 謝

宣伝 みんな買ってや!

丸岡さんも書いています。全国の書店で発売中!

『実録! 刑務所のなか』 ——パクられた私たちのムショ体験!——

怖い、でも知りたい!これがムショ暮らしだ! ヤクザ組長、日本赤軍、暴走族からふつうの人まで、自ら語る、犯罪、取調べ、獄中生活。

なにかの間違いでも不測の事態でもいい。もし、あなたがある事件の被疑者となり、数分後に逮捕され、留置所、はては拘置所へ送られるとすれば、どうするだろう?

「檻のなか」「塀のなか」では、体験者のみが知る、塀外の世界が待ち受けている。ヤクザの組長、弁護士、ジャンキー、暴走族そしてふつうの人々が、自らの体験をとおして語る「監獄/その世界」。ムショ暮らしの一切合財、教えます。

定価:本体562円+税 ISBN:4-7966-1597-0

拝啓、「天声人語」様－英雄と「テロリスト」

2000.03　丸岡修

私が３月７日、朝日新聞・天声人語に書いた手紙を紹介します。なぜかと言うと、リッダ闘争で一般旅行者に巻き添え死傷者が出たことによって疑問を表明する人は、本誌読者にも割りと多くおられるので。

岡本同志たち５人が拘束された97年の３月に天声人語は「非情なテロリストによる無差別テロ」としてリッダ闘争を非難し、岡本同志をなじりました。それに対して何か書かねばと思っていましたが、その時間がなく、釈放時期にあたり、ようやく書いたのがコレです。

この手紙（資料を添えた）は読まれたようで、岡本同志の政治亡命と他４名の帰国で騒然とした翌日３月19日の天声人語は、「テロリスト」非難が一方的なものにはなっていませんでした。日本ではテロリストでも中東では英雄となることについて考察する文章に。リンカーンが米国北部では奴隷解放者でも南部では侵略者、豊臣秀吉は日本で愛されているが韓国では侵略者となる例を示し。

やはりきちんとした対応は必要だと思いました。日本赤軍は今まで日本でマスコミに出て話しをする者がおらず（理解者として代弁された文化人の方たちはいましたが、大変な風当りを受けた）、言われっぱなし。公然の公法的組織は強く必要とされています。

尚97年の天声人語による「無差別テロ」非難への反論は『噂の真相』97・５月号にも書いています。

『噂』のＨＰ　http://www.uwashin.com/

朝日新聞社　「天声人語」御中

拝啓　早春の候、風が柔らかくなって参りました。

貴社ますますご隆盛の由、何よりと存じ上げます。

私は、中学一年生の時から貴コラム（天声人語）及び貴紙社説の熱心な愛読者でした。防衛大学校をも志望大学の一つにしていたほどの右翼的少年が政治意識に目覚め、中学三年生の時には、日本の体制変革とベトナム反戦をうったえるようになったのは貴紙のおかげでした。

当時の私は、森編集委員や本多勝一記者のファンでした。

さて、本題に入ります。

１．私は現在、東京拘置所在監中の被告人です。「日本赤軍幹部（警察が勝手に称しただけで証拠がなく裁判所もそのような認定はしていません）」などとマスコミに報じられているので、私の名もご存知のことと思います。

私自身は２件の「ハイジャック事件」の「犯人」と公安当局にされてしまいましたが、無関与の無実です。マスコミは警察発表を鵜呑みにしているので、私が無罪を訴えても信じては頂けないかと思います。

今回はそのことについてではなく、97年にレバノンで拘束された岡本公三（同志）ら５名のことについて書かせていただきます。

97年春、貴コラムでお書きになられたご非難（非難に「ご」はつけませんね。「ご批判」よりは非難の趣旨でしたが、私たちが腹を立てる筋ではありませんので「ご非難」）に対して、一筆しておかねばと、ずっと考えておりました。気にはなり続けておりましたが、96年２月に肺炎重体で死にかけて以降（呼吸不全、多臓器不全）、慢性心不全で病舎に収容されたまま未だに病人生活

していることもあり、今日になってしまいました。

「天声人語」への抗議ということでは全くなく、私たちの側の考えもお知りになって頂きたくてお便りする次第です。

私たち日本赤軍への支持あるいは同意を求めるものでは決してなく、公安当局側のフィクションだけでなく、「過激派」の言い分も情報としてお持ち頂きたいからです。私たちをいかように批判されようと非難されようと貴紙のご自由です。しかし、次の２点をお願いしたいのです。第一に、事実に基づくこと(公安当局や日本政府の発表の鵜呑みではなく)、第二に、当事者の言い分にも賛成する否かは別に、耳を傾けてほしい。

2. この手紙とは別便にて、上述の「拘束事件」についての資料(集会資料集以外は私が執筆)を送らせて頂きました。超多忙のことと存じますが、ご一読をお願いする次第です。

①「敗れても滅びず」
②「噂の真相　97・５月号」
③「創　97・11月号」

の３点をお読み頂ければ、「拘束事件」を私たちがどのように捉えているか、お知り頂けると思います。他の２点はご参考までに。(④「創　97・７月号」　⑤６.28ＪＲＡ救援団帰国報告集会資料集)

3. リッダ闘争(皆さんの言われるテルアビブ空港乱射事件)の巻き添えで死傷された非戦闘員の方々には、ただ謝罪するしかありません。その点の批判、非難は甘受するしかないと考えています。作戦は一般市民の殺傷を目的にしたものでは決してなく、イスラエル軍空港警備隊との銃撃戦を目的としておりました。ところが、イスラエルの警備当局は「伏せろ」と命令し、伏せなかった者に対しては巻き添えやむなしという戦術をとっていました。イスラエル軍によるウガンダエンテベ空港での「人質解放作戦」を描いた映画『エンテベの90分(勝利)』などの例を示すまでもなく。

それでも、イスラエル軍の発砲による犠牲者が多い事実があるものの、私たちの部隊がロビーで戦闘を始めなければ(始めざるを得なかった情況であったようですが)、巻き添え犠牲者を発生させなかったはずなのですから、非難されても仕方はありません。

これは言い訳にしかなりませんが、パレスチナ解放勢力との共同作戦という性格上、戦争状態にある当事者間(アラブ対イスラエル)の戦闘エスカレートの中で、パレスチナ側の作戦指揮に従わざるを得なかった面もあります。

現地でのパレスチナ人民が置かれた情況から言えば、私たちやパレスチナ解放勢力の側のみが日本のマスコミに一方的に非難されるのは不公平かと思います。

イスラエル軍によるベイルート空港爆撃、パレスチナ人避難民キャンプへの爆撃という情況、イスラエル側に非戦闘員のアラブ人女性、子供たちが殺されてきた情況からもご考慮をお願いします。昨年のＮＡＴＯ軍によるユーゴスラビィアにおける爆撃が一般市民の犠牲者発生を前提にして(ＮＡＴＯ軍高官も言明)されたように、イスラエル軍の攻撃は1948年にあったディール・ヤシン村の虐殺(後に首相になったベギンに率いられたテロ集団によって254人も住民が射殺された。リッダ闘争の作戦名「ディール・ヤシン」はここから名付けられた)に代表されるように、無差別テロは侵略国家、侵略者共の手段です。だからと言って、パレスチナ側が米国やイスラエルと同じことをやって良いとならないのは当たり前です。

しかし、被侵略・被抑圧側のアラブ側が「巻き添え犠牲者が生じてもやむを得ない」と考えるのもまた、やむを得ないのではないでしょうか。オウム真理教のテロのように、最初から一般市民を対象に狙ったものではないからです。家を破壊され、土地を奪われ、家族・友人を殺されてきたパレスチナ人にとっては、その野蛮行為を実行したのがユダヤ人の入植者であり、一般市民だったのですから、人々の憎悪は被占領地パレスチナに住む全てのユダヤ人に向いてしまう情況があるのです。もちろん、やられたから同じことをやり返していたのでは、憎悪の悪循環にしかなりません。ユダヤ人だからと言って、金持ちだからと言っ

て殺されるようなことがあってはなりません。私たちの理屈ではそうです。ただその理屈は、「イスラエル側は軍も市民も無差別に攻撃してくるのに、なぜこちらのパレスチナ側が『最悪の場合は巻き添えもあるかもしれない』形での反撃すら出来ないのか」と問い返された時、ぐらつきます。「ならば、巻き添え犠牲者を極力出さない形でやるしかない」とリッダの時にはなりました。「それでも、抵抗は平和的に」とおっしゃることでしょう。しかし、目の前で愛する者を失い、明日はまた１人失うかもしれないという人々にとっては、「黙って殺されよ」と言うに等しいのです。もちろん「テロの応酬」は断たれるべきです。

2000万人以上のアジア人民を殺害しておきながら「太平洋戦争での死者は800万人」と言い張る日本政府。南京大虐殺ですら保守勢力の多くは「そのような事実は無かった」と言い張っています。オーストリア自由党のハイダー党首がヨーロッパ中の非難を受けていますが、日本の保守派の人々が日頃述べていることと何ら内容に違いはありません。であるのに、日本人にとっては全くの他人事です。そんな日本人にパレスチナ解放勢力を非難する資格が果たしてあるのでしょうか。米国やイスラエルによる残虐行為には口をつぐんでおいて。

4. 米国の原爆投下は最初から一般市民の殺傷を目的にしていましたが、リッダ闘争は結果として巻き添え犠牲者を出してしまったものの、私たちは決して「無差別」を目的にしてきたことはありません。

もちろん、結果には責任を持たねばならず、ただお詫びするのみです。

これ以降、日本赤軍としては巻き添えの死者を出してはいません。しかし、航空機のハイジャックのように、一般市民をも「人質」にしてしまい、事件に巻き込んでしまいました。私たちにはいろいろな理由や言い訳はありますが、被害者の方たちには深くお詫びします。

私たちは1977年の「ダッカ」以降、ハイジャックを初めとした一般市民をも「人質」にしてしまう作戦は一切中止しました。先日もインド・アフガニスタンでハイジャックがあったように、もし私たちがその気になれば難しくはありません。それでも20数年間、占拠やハイジャックをやらないのは、やる力がないのではなく、実行しないことに決めたからです。

1989年の『朝日ジャーナル』誌での重信房子インタビューにあるように、「武闘路線」は日本人民には望まれていないとして、転換しております。元々、武闘中心の路線は75年春に停止しています。(インタビュー掲載時に編集部は、「獄中同志奪還を目指す」という間違った括り方をしましたが、編集部自身がその後の号で謝罪し撤回しています)

5. 今回のレバノンでの「拘束事件」での貴誌の報道には若干の問題があります。

97年に５名と同時に拘束されたレバノン人オマイヤ・アブード氏について、まるで非合法活動をやっていたかのように報じ、「有罪」を前提にした氏の追跡記事まで掲載されています。

ところが、彼女が起訴された「罪状」は、日本赤軍とは関係なく、「医師の資格を持たずに診療行為をした」というものでした。そして、その判決は「その事実はない」とした完全無罪でした。読売新聞などは一応報じたのに対し、貴紙は全く触れていませんでした。犯人視報道をさんざんしておいて、無罪を一切報じないというのは余りにも無責任ではないでしょうか。97年の話しで恐縮です。

6. 短く２、３枚のつもりが思わぬ長さになっていまい、申し訳ありません。忙中にお時間をとらせ、すみませんでした。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

寒の戻りもあります。ご自愛願います。

敬具

同志たちをあらためて誇りに思います

2000.3.23　浴田由紀子

お元気ですか？　春です。出立と再生のときです。

「時が駆け足で通り抜けて行く」と感じるのは私だけでしょうか。モタモタしていて、万事に乗り遅れるそうです。

レバノンで捕らえられていた５人の同志たちに対するレバノン政府の勇気ある決断と、それを可能にしてくれたアラブ各国、人民の熱い支援と協力に心から感謝しています。アラブ・パレスチナの人々と共に30年近い年月を共に生き、闘ってきた同志たちをあらためて誇りに思います。

その一方で、この国の政府・外務省と公安警察はまたもレバノン・ヨルダンの一部役人を買収し、経済協力・ＯＤＡという美しい名の金でレバノンの主権を踏みにじり、４人の同志たちを拉致・連行するという暴挙を行いました。今回、日本政府が行ったことは、50余年前、「アジアの解放」という美しい言葉でアジア各国に侵略し、武力で支配・抑圧・搾取を行ったことと何ら変わるものではありません。このようなはずべき国の、恥ずべき支配層を許していることが恥ずかしいです。アラブの人々と各国が岡本とその同志たちに示してくれた友情・連帯と支援をこのような形で踏みにじったこの国を、真に人々が対応に平和的に生きられる国に、世界中の人と国と平等に共存しうる国に変えていくことによって、アラブ・パレスチナの人々と共にした30年をさらに飛躍させていきたいと思っています。

レバノンに１人残された岡本同志への激励と支援を、そして国内に新たな活動の場を持つことの出来た同志たちの裁判闘争とさらに引き続く闘いへの支援をお願いします。「ザ・パスポート」も陣形強化ですね。

浴田裁判は、３月22日に公安警察官(佐藤司郎：　バンコクまで浴田を拉致しに出向いた)が搭乗して「大道寺あや子、佐々木規夫は超法規的に釈放されて逃亡中である」と証言しました。「釈放された者がなぜ逃亡中なのか？」という弁護人の丁寧かつ理をつくした質問に対しては、シドロモドロ・オトボケ・シカト……で一切答えられず、「入管に問い合わせても、もとの住居地にもいないし、家族に聞いても分からない。(随分前に)声明を出して「アラブに居る」と書いてあるから、国外逃亡中……」という全く非科学的というか、いい加減な証言を繰り返しました。という訳で２人の同志を私の裁判の「共犯証人」として検事が出廷させることは難しいでしょう。被告・弁護側も２人の証言は特に望みません。

次回から「自白の任意性」に入ります。いきなり本人質問です。クソーッ！　「自白」なぞするからじゃあ!!　とにかくあの日々の誤りを克服し得るものにすべく準備に集中します。

難局を勝利の土台へ！　張り切って新しい一歩を踏み出しましょう。共に!!

ゆき子

オリオンの輝き いまだ消えず 3月20日 ワッタン

3月7日、3年の刑期を満了した、拘束中の日本赤軍メンバーいわゆる「ベイルート5」は、その後レバノン政府内に設けられた、内相・警察官僚・外務次官・官房長官といった4名の官僚からなる、赤軍5名の亡命申請について協議する”亡命委員会”によって亡命決定が出されるまでの間「身柄一時預り」となっていた。

政府としてこの問題の判断を”亡命委員会”に一任するかたちになったが、会議日程すら外部には知らせないまま、16日に行われて決定が下された。そして翌17日、急遽レバノン政府からマスコミ各社に対して配信された情報によると、岡本氏については亡命が認められ、足立、戸平、山本、和光氏の4名は国外退去処分が執行された。

4名の退去先はヨルダンに指定されその日のうちにアンマン空港に送り出されてしまった。何と手回しのいいことに日本政府がチャーターしたアエロフロート航空機がアンマン空港に待機していて、ヨルダンへの退去を拒否する彼らの意志も認められないまま、同航空機への乗り換えを（刑期を終えた者であるにもかかわらず、後ろ手に手錠を掛けられ）強行されたのである。

このような日本政府の越権行為を断じて許す訳にはいかない。ここまでの状況を見ただけでも日本政府はあきらかに日本大使館などを通じてレバノン”亡命委員会”に介入していた可能性が強い。その他周辺関係諸国に対する働きかけやこれら諸国など連携の手際よさは、アメリカやイスラエルそして他のアラブ諸国など、連中の言う「テロリスト」日本赤軍を国際駆け引きの交渉カードとして使うのに、今回のケースは絶妙のタイミングだったと言えよう。

しかしながら、今もなおレバノンに留置されている岡本氏は、レバノンのみならずアラブ・パレスチナの多くの人々から、侵略者イスラエルと自己犠牲をも厭わず闘った解放闘争の象徴的人物のひとりとして見られており、彼の身柄に対してうかつな決定を下すことは、それこそレバノン現政権の支持基盤を失う事になりかねない。

次期総選挙を前にして国民に対するイメージを出来るだけ良くしておこうとする見通しと、アラブ内における各派解放勢力と日本やアメリカなど経済支援国からの圧力との間で、出来るだけ摩擦を少なくさせるために取ったギリギリの選択だったと言えよう。

当然のごとく現地救援は、7日以降ずっと続けられていた内務省前での座り込み抗議行動を更に続行させ、17日には200名近い学生市民が駆けつけ大規模な抗議デモに発展した。

なお、不当な手段によって日本に送還された4名のうち戸平氏は東京拘置所に収監され、3名は警視庁に留置されている。18日にはウナディコムのH氏が救援連絡センターに詰めて各方面との連絡をとりあった。

帰国者の裁判を考える会は、19日に弁護士とともに弁護人選任の手続きを済ませ、日用品などの差し入れも行なった。さらに、考える会ではこの”送還”直前から、現地救援”岡本の友人の会”とともにハンスト座り込みに参加するために準備していたところ、出発直前のこの一件で急遽、スケジュールを変更して現地での行程を亡命が認められた、釈放後の岡本氏の近況（病状や医者の派遣が必要かどうか）をリポートし、今後も現地、友人の会と岡本氏の生活支援に相互に何が出来るのかよく協議していきたい。

現在の彼の病状では、自炊生活することもひとりで外出すること（もっとも暫く軟禁生活が続くと思うが）さえ困難な状態なので介護者が常に必要になって来る。彼は13年間というイスラエルの獄中生活で精神にダメージを受け、捕虜交換で解放された後は年々、回復しており薬の服用もかなり少なくなっていたのだが、3年前の”拘束事件”で刑務所に入ってから病状が悪化してしまった。

国内に送還されたメンバーについては、我々救援が責任をもって裁判なり獄中生活なりをサポートしていく。アメリカや日本など帝国主義各国の情報機関は今、こぞって各地の国際的な解放勢力を解体しようと策動している。

我々、考える会は単に救援団体と言えども世界的にこのような「異端者」が弾圧のターゲットにさらされているのを見過ごす訳にはいかない。レバノンにひとり亡命が認められるかたちで残されてしまった岡本氏には、まだまだ多くのアラブ・パレスチナの人々が支えてくれている。だが、彼の置かれている状況が安定的なものなのかどうか、やはり日本から頻繁に仲間が訪れて生活の支援を行なった方が良いのだ。

かつて岡本らの闘いに共感して運動に加わった日本のむかしの仲間たち！　レバノンに行って彼と会おう。そして彼と大いに熱く語り合おう。

ディリー・スター紙の報道から

3／24(金)<ＪＲＡ支持者達、内務省へデモ>

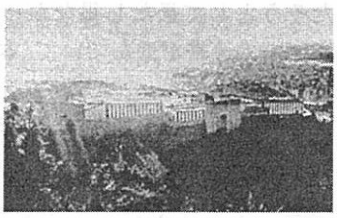
木曜日、ＪＲＡ４名の秘密裏の国外退去、そして先週に起こった首相官邸前でのデモ隊に対する警察の暴力に抗議する行動があった。「ムール打倒!」(内相ミシェル・ムール)を叫んで、リヤド・ソルハ広場からサナィエ公園の内務省まで、約100名の学生が、降りしきる雨の中を行進。「公三、公三。帝国主義をやっつけろ!シオニズムをやっつけろ!」のシュプレヒコールのなか、活動家のイハブ・ナーセルは、「我々は、政府がどんなに我々を弾圧しようとも、我々はデモを続け、我々の意見を明らかにする」と演説。

岡本公三は、レバノンへの政治亡命が認められた唯一のＪＲＡメンバーである。不法滞在、偽装旅券行使の罪で、彼も他の４名と一緒に、３年の刑期を満了した。

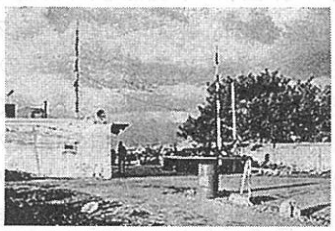
先週の金曜日、政府は４名をヨルダンへ国外追放したが、ヨルダン当局は入国を拒否し、日本へと送り返された。日本は、５名全員をテロリスト容疑で身柄確保を要求しており、1970年代に活発に行動していた残りのメンバーをも手配している。

４名の国外追放後、約300名の支援者がホス首相官邸前でデモを行い、警官隊と衝突。８名が負傷した。

レバノンでの抗議行動を伝える現地紙



岡本さんたちが収監されていたルミエ刑務所遠景



ルミエ刑務所入り口ゲート

社会人2年生〈1〉

吉村和江　2000年3月24日(金)

「あれ、やっと2年生になったみたい。でも、何故？」と思われる読者も多いことでしょう。一つには、岡本の政治亡命実現－4名の強制送還があります。でも、T(浴田息子)の高校3年進級ということが重い。

皆さんのエールのおかげで、Tが何とか進級できたのです。それを思うと、いつまでも1年生をやっていては申し訳ない気持。実際の話、まだまだ自信はありません。足立、和光、山本に桜田門へ差し入れに行くたびに、東京の地図を開かないと、どの地下鉄で行けばよいのかも分かりませんし、時には、逆方向に乗ったりして。しかし、本人がどう思うかに関係なく、私がもっと自覚的に成長しないことには、Tの成長に遅れることになります。もう遅いという声も。執行猶予期限は、まだ1年弱残っておりますが、もう社会人2年生になります。

1．岡本のこと

レバノン政治亡命者第1号になれました。これも、レバノン、パレスチナ、その他全アラブの人々の共感・支持あればこそ。「テロリスト」なのか、「反イスラエル・レジスタンスの戦友」なのか、日本での受け止め方の別れるところでしょう。少なくとも、「自分達の困難な闘いに参加してくれた友人」とみなす人々が、今回の政治亡命を実現させたという事実は、重いと思います。私は、大変、感謝しています。

皆さんにお願いしたいことがあります。アラブの世論にも、もう少し耳を傾けてみませんか？現在も、軍隊をもってレバノン南部、ゴラン高原、パレスチナを占領し続けているイスラエルの、そしてそれを後押しするクリントン政権、それに追随するだけの我国の中東外交政策が、果たして、地域の人々にどのような和平をもたらすのか、そこから目を離さないで下さい。侵略されたことのない(元寇が例外的にあるとしても)、外国軍に占領されたことのない(敗戦後の数年間以外は)、植民地にされた経験のない私達には、逆の立場の人々の思いを理解するのが大変難しいことだと思います。この歴史的経験と現実を度外視して語るのは片手落ちになると思います。また、現在の日本が、アジアの人々にどのように映っているか、それともからめて、考えて欲しいと思うのです。

何か遠い彼方のできごとではないと思うのです、連帯は。足を踏まれたら、誰でも痛い。足を踏まれた人が痛がっている時に、「ああ、痛いだろうな。助けようか」となるか、「痛そうね」で済ますか、痛いだろうなとも思わないか、人によって反応が異なります。相手の痛みがわかる、それが大事なことではないでしょうか？その上で、まず、踏んでいる足をどけようとするのは、間違っているとは思いません。

そして、今、踏まれて痛がっている人に、「踏まれたからと言って、踏み返してはいけませんよ」と説教するのは、どうでしょう？私は、自分がその人の立場だったら、そんな話を聞かされて、「それもそうだな」とは納得できません。踏んだ当の本人は、踏んでいる事実さえ否定し、踏み続ける、そして、誰も「おい、足を踏んでいるよ。踏むのはやめなさい」とも注意しないとしたら？私は、抵抗します。

私は、岡本の連帯行動は、日本とアラブの連帯・交流の一つであると思います。日本赤軍だけが連帯行動をしたのではありませんし、現在は、日本赤軍が果たそうとして果たし得なかった分野やレベルの連帯が進んでいて、本当に嬉しいのです。

アラブ諸国の望む形の「公正で包括的な和平」が実現するには、まだまだ長い時間がかかるでしょうし、矛盾も山積みしています。アラブ民族解放運動、パレス

チナ解放運動は死滅したのではなく、新しい段階に入ったと思います。どのような段階かというと、社会主義諸国という後方なしで、自分達の力だけで達成しなくてはならない段階、グローバルな「市場民主主義」(つまり、独占にとっての民主主義。資本の自由な活動にとっての民主主義)の中で、南北問題の中で、アラブ各国内の民主主義を求める運動が進む段階になっているだろうと思います。

それと日本にいる自分とは、どういう関係があるのでしょう？日本で人々が現実政治に参加していく度合いを強めれば強めるほど(民主主義的諸権利の行使とでも言うことができるかも)、アジア近隣諸国、また遠いアラブの人々との友好関係が作れるようになるでしょう。その土台には、共感が必要だと思います。そうした共感があれば、外国の人々の民主化の前進に共同もするでしょうし、声援も送りたくなるでしょう。経済的な利害・打算だけではなく。

同志として、人として、岡本の生き方に、私は共感しています。

2．Tのこと

この年代の青年とのコミュニケーションの難しいこと！考えてみれば、自分の高校時代、親とどんなコミュニケーションをしてきたことか！私の場合は、ともかく教員になりたかった。終生大島で島の子供たちを教えたいと思っていたので、ともかく教員免状をとるべく、大学進学を目標にしていました。朝6時頃のバスに乗って出かけ、夕方も最終バスで帰宅。くたくたに疲れて、空腹でした。「あれ、この1週間くらい、父の顔を見ていないなあ」ということも、まま、あったものです。あの頃、両親は、私が何を考えているのか、話し合いたかったのではないだろうか？私は、両親の気持ちに、どうやって応えてきただろうか？今になって、親の気持ち、親がしてくれたことに感謝しても遅いのかしら。「親になったら、わかる」と言われて、大いに反発したものでしたが、今は、「こういう事だったのね」と納得。今更ながら、両親に感謝しています。

Tは、何を人生の目標にしているのだろうか？　何か困ったことでもないだろうか？　つい、気になって、その方向に話を持っていこうにも、とりつく島もない態度。「心配することはない」「心配しすぎだ！」で、終わり。

自立して行こうとする青年からしたら、困ってもいないのに、ああだ、こうだとうるさいだけなのでしょうか？「彼が困った時に、さっと、彼の必要とする手助けができればよい」とは思っても、横目でチラチラと見る、そんなことがうるさく感じるのでしょう。溜め息ばかりです。「もう少し、話してくれても良いのに」と、不満をかこちつつ。また、私の失敗から、辛い、悔しい思いと経験を彼に強いてきたことの責任を、どうとっていけるのかという原点に立ち帰りつつ。かと言って、落ち込んでばかりもいられません。どの青年も、固有の条件の中でしか生きられない訳ですから、Tを格別不運な青年とは見ないようにも努力。歴史と現実の世の中に成長していくTを、特別視しないように。誰にとっても、息子は世界に二人といない特別な存在です。しかし、自分の隣にも、同じように考えて、悩んでいる母親がいる、そう考えています。最近の諸事件を見聞きするにつけ(マスコミ報道の全部を信じはしませんが)、親と子の関係を教えらる気持ちです。誰もが悩みながら、これで良いのだろうかと考えながら、子供の自立を側で見ているのでしょうね。私の方が、自立していないだけなのかも知れません。

3．送還された4人のこと

さて、皆さんのおかげで、桜田門の3名(足立、和光、山本)も、東拘(小菅)の戸平も、元気にしている様子です。ありがとうございます。自らの選択として反権力の道に進んだ以上、特に私自身の失敗の結果としても続続と同志が逮捕された訳ですから、彼らの救援を私が全力でやるのは当たり前。もし、協力して下さる方がいれば、「ありがとうございます」。主義主張には批判もあ

交付される岡本さんのパスポート

り、反対だが、古いつきあいだし、放っておくのも何だからと、協力してくださる方もいますし、反権力一筋、人道第一という立場からの方もいらっしゃいます。そうした方々のエネルギーを頂く以上、ここで退いてはなるものかです。

人間、負けた時、不運な時に、本音が出ます。その時に、状況や誰かのせいにしたり、「自分は正しいのだから、助けて貰って当りまえ」と考えたりしがちです。が、自分の撒いた種というか、自分の責任と考えて乗り越えていく努力をする、それが大切だと思います。パレスチナの現場でも、多くの乗り越え方を見聞きしましたし、日本赤軍自身、何度もの危機、というか、「おー、どうしようか!」という事の連続でもありました。今もそうです。人のやる事をあれこれ批評するのは易しいものですが、いざ、自分が乗り越えるとなると、簡単でもありません。ですから、私は、試行錯誤を続けて行きます。本来であれば、わたし達の救援に皆さんのエネルギーを集めるより、皆さん自身の前進に向けて集中して頂いた方が良いのに、支援をお願いする矛盾をかみ締めつつ。

私も"「自分達の行動は正しい。だから支援を受けて当たり前」という態度じゃあないの!?"との批判を受けています。当初、非常に憤慨しました。しかし、丸岡からたしなめられ、頭も冷えて、言われる根拠がなかっただろうかと問い返してみたりして。自分の経験からしても、「政治犯」が一般の獄中者より格段に恵まれている事実も理解しています。冤罪で放り込まれて、家族・友人も社会的制裁の重さゆえに関係を絶ち、一人ぼっちで呻吟するしかない人が多いのです。獄中で、そういう人々との文通もありました。私の同志達は、そうした人々に比べれば外に救援のグループもあって、一人ぼっちではありません。また、レバノンには「岡本の友人委員会」という救援グループもあり、メールなどで交流しています。お礼をいうと、「岡本は私達のことを助けてくれた。だから、彼を守るのは当たり前」という答が返ってきます。有り難いことです。

また、表だっては言わないだけで、私のあり方・行動が「期待外れだ」と考えておられる方も多いでしょう。「期待外れ」の姿が、現実の自分なのだと思います。ですから、行動で、一歩づつ乗り越えて行こうと思います。正しいことを言うかどうかは、大した力にはならないようでしょうし。誰にでも、正しいことは言えますから。それよりも、自分の間違いを直し続けるその過程の中で、皆さんと出会って行きたい、それだけです。それに、私は誰かの期待に応えるために根を下ろそうとしている訳でもありません。今を変えたいとして生き続ける人々の一員として、一歩づつ行こうと思っているだけです。

「それなら、君は誰と、何人と出会ったのか?」と問う方もおられましょう。私の答は、「まだ、ぼんやりとしています」です。相手が「確かに、出合っている。人としての共感がある」と感じているかどうか、それが大切なことだから。また、その実感も、自分のあり方如何では、失せてしまうものでしょう。読者の皆さんとの出会いも、その一つだと思います。どのように読まれているのか、五里霧中ですが、続けて行こうと考えています。読んでね!

2年生宣言を、自分で自分に出しました。これからも、よろしくお願いします。

ＪＲＡ４名の送還劇、レバノンでは…… レバノン派遣員

皆さんご機嫌いかがですか？　こちらは最悪です。とうとうやられてしまった……日本政府お得意の、国際法違反で。今回は、ルミエ刑務所での幸せな結婚式の模様からお伝えしようと思っていたのに、最悪の送還について報告しなければいけません。そう言う訳で今回は、今まで、レバノンの人達がどれだけＪＲＡ５人のメンバーと頑張ってきたか、そして、レバノンの人達が、どんなにＪＲＡを愛しているのか伝えたいと思います。

３月６日、内務省前の道路で、若者達の夜通し座りこみのストライキが始まった。ＪＲＡメンバー５人に政治亡命が出されるまで、立ち退かない！　と、３月17日４人の移送まで、本当に頑張った。

彼らにとって、おおやけのハンガーストライキや、座りこみの抗議は、初めての経験だった。皆、仕事や学校を抱えながら、交代で、常に2,30人の若者が路上で夜を過ごした。(うち、５人程は、初めから最後まで本当にそこを１度も動かなかった。そして、毎日のように行われたデモで、多いときは300人以上。その大勢集まった人々が、座りこみに合流する。その都度、道路が溢れんばかりの人だらけになる。)調度レバノンは最も冷え込む季節、雨風をしのげる場所ではなかったので、びしょ濡れになりながら、青い唇を震わせて、記者のインタビューに答える若者達に、市民の関心がたかまった。

こんな状態を、日本の記者達は、わざと人数が少なく見えるようなショットを撮ったり、特にこのことに関心がない人や、反対意見の人のインタビューだけを日本の新聞に載せたりしている。どこまで嘘もんのジャーナリスト達なんだ！　若者達に近づいてくるときは、良い顔して、座りこみ大変ですねー、心配だなー、無理しないで下さい、頑張って！　とか言っといて、彼らの意見なんて全然記事にせず、書く事はめちゃくちゃ……同じ日本人として、とても恥ずかしかった。

獄中の４人も、外の若者達との連帯の意味も込めて、３月６日から水を除いてのハンガーストライキに入った。もちろんハンストは、刑務所では違反行為なので懲罰房に入れられた。岡本さんだけは、一人いつもの房にいたが、彼の生活が困難になるため、ハンストスタート３日後、一人ストップし、岡本さんと合流した。そして、３月14日の夜、これ以上続けると危険だからと、刑務所側に強制的にストップさせられた。皆だいぶ肉が落ちてはいたが、顔色はよく、健康そうだった、ヨカッタ！

私は、レバノン政府から政治的な行動をしてはいけないと釘を打たれているので、座りこみや、ハンスト、デモにも一切参加できない。皆、頑張っているのに何もできないのが悔しい!!

じっとしていられなくて、毎晩座りこみをしてる場所の前をタクシーで通り過ぎ、頑張って！　と声無き声援を送る……。

３月７日、刑期満了をすぎても、何も状況は変わらない。たぶん第３国行きだろうな……とは思っていたが、余りにも突然だった。

４人は突然、イミグレーションに移るから10分で荷物をまとめろと言われ、外に出ると後ろ手錠に目隠しと、縄で繋がれてそのままルミエからベイルート空港、アンマンまで直送された。アンマンで、目隠しを取り、見せられた一時渡航証は、アンマンの在日本大使館から出されたものだった。アンマンからロシアの飛行機アエロフロートでモスクワ経由、日本へ……一応どの国のメンツもたてられたシナリオだった。

４人が移動したらしい。という一報を聞いたのは夕方、日本の友人からの電話でだった。すぐに友人達と合流し、新しい情報を待った。友人の連絡やＴＶのニュースから一回アンマンまで行って、又レバノンに戻ってきている、とか。すでに、ヨルダンに送られたかもしれないと聞き、ガックリ……。あぁ、その後は日本だ、ほぼ間違いないだろうと思った。

待機していた家は、国会議員のナジャハ・ワキムの家で、始めは身内だけだったのに、続々

と若者が集まってきた。皆、息があがり、すごく興奮している。けが人もどんどん運ばれてくる。私はデモがあった事を知らなかったので、いったい何が起こっているのかさっぱり判らなかった。最後は40人近い若者が、続きの２部屋に集まった。入ってくる若者一人一人を、ナジャハ・ワキムは、アハレン!(ようこそ)と言って受け入れる。すごい人だ！　国会議員がここまでするか？　若者達は、機動隊に蹴ちらされ、追いかけ回されて、走ってここまで逃げてきたのだった。ほぼ全員泥だらけでソファやテーブル、あちこちに所狭しと座っている。そんななか、ナジャ・ハキムの奥さんは手際よくコーヒーを振る舞ったり、けが人の手当をしたりしている。若者達は、レバノン一般市民の人々だ。ナジャハ・ワキムは、まさに人々の側の国会議員だ。改めて彼らを尊敬し、感動した。

場の雰囲気は、何となくハディー待ちだった。"岡本公三とその友人達を支援する会"のスポークスマンで、代表的な役割を果たしている彼は、機動隊に狙い討ちされ袋叩きにあい、ライフル銃の底で頭を殴られ、気を失って病院に担ぎ込まれてしまった。他にも病院に行ったものや、逮捕されたものが何人もいた。仲間を心配顔で探す若者達は、手に手に携帯電話を持っている。皆が一斉に話すので、騒がしいし、ともかく熱気がすごかった。ハディーの奥さんクリスチャンも、大きなお腹を抱えて旦那さんを待っている。普段からキリッとしてボーイッシュな彼女だが、不安と緊張、初産のせいもあって具合が悪そうにトイレを出たり入ったりしている。AM1:30頃、傷だらけでハディーが戻ってきた。左手を吊るし、後頭部は頭髪を剃って血だらけの包帯を当てている。泣きながら、私を抱きしめて、"I am sorry"と、つたない英語で言った。あなたのせいじゃないじゃない……と、話したけど興奮していて何を話したのか覚えていない。その日は結局AM4:00頃まで若者がナジャハ・ワキムの家を出たり入ったりしていた。

翌朝、日本から４人が送還されている事を確認したと連絡があり、もしかして、戻ってくる可能性が有るのではないかという少しの望みも消え去って、涙が止まらない。予想していた結果だったけど、実際にこうなると、想像していなかった程の大きなショックだった。彼らは、日本で言われてるテロリストでも、人として個人的に思想家とか革命家でも、何でもいいけど彼らがここに帰ってこれる事はもうないかもしれない。彼らがレバノンで過ごした約30年間は何だったんだろう……口に出して説明できないような悔しさとショック、大声で泣いた。

翌朝、岡本さんの差し入れ弁当を作っていると、新鮮なカリフラワーだからね、と言って炊き出し班のおばちゃんが５人分と、自分の家族の分をわけ始めて、手を止めた。もう１人前でいいんだったね、と泣きながらもとの皿にカリフラワーを戻す。誰もかれも突然のレバノン、日本政府のやった汚い送還劇にに驚き、怒り、泣いている。でも長いこと戦争下にあるこの国の人たちは、涙や、気持ちをコントロールするのがうまくて、私が泣いてると、今泣いちゃ駄目、強くなれないから、我慢するの。と言って、気を落ちつかせる時に飲むお花のエッセンスをお茶にして入れてくれた。この間感じたが、誰かが泣いていると、その人を守らなきゃ！　元気づけなくちゃ！　と考えるので、逆に強くなれる。泣いてなんかいられない。

レバノンの友人、支援者たちは大いに怒っている。これからも、レバノンと日本の政府に対して、抗議行動を続ける。さっそく３月24日ハムラで、大きなデモがあった。300人以上の人が集まり、ハディーは、国会議員のナジャハ・ワキムと共に記者会見を開き、彼らに請求されていた罰金や、裁判費用は、日本政府から４人送還の協力のために支払われた金で、レバノン政府が払うべきだと訴え、これからも抗議行動を続けると話した。

これから、岡本さんはどうなるんだろう……頭の中を入れ変えて、私たちが、レバノンでできる事を考えていかなきゃいけない。ともかく岡本さんの安全を保つ事。レバノン政府は、彼にＩＤカード(レバノンの身分証明書)を発行した。でも、まだ安心はできない。日本では、もう救援のプロの先生方が４人をフォローしてくれている。皆さん！　これから、以前以上に彼らへのサポートを強めてください！　これからが大変です！　懲りずに頑張りましょう!!

皆さんのご協力と絶大なるカンパを！

レバノンで政治亡命を認められた岡本公三さん、日本でこれから公判闘争を闘う４名(足立正生さん、戸平和夫さん、山本万里子さん、和光晴生さん)を支える為、帰国者の裁判を考える会は全力を尽くします。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

我々、帰国者の裁判を考える会は90号で『最善を尽くして最悪に備え、レバノン救援と「送還」後の救援準備にご協力を！』と皆さんに呼びかけました。その結果、会計報告でお分かりの通り、67558円のカンパを頂きました。どうもありがとうございます。

90号での呼びかけの趣旨は３点にまとめていました。(90号ｐ22-23参照のこと)

そして現在、レバノン当局による「国外退去」とそれに続く日本政府による「強制送還」が実行され、５名の内、４名は強制的に日本に戻され、内３名は警視庁の代用監獄での取り調べ、１名は東京拘置所に収監されています。レバノンで政治亡命を唯一認められた岡本さんは、13年間に及ぶイスラエルの刑務所での虐待によって肉体的精神的にダメージを受けており、日本政府がレバノン当局が政治亡命を正式に認めた後も執拗に身柄引渡しを求め続けているという情況で生活を送っています。今後、日本では本格的な公判闘争が、またレバノンでは岡本さん支援が日本政府の圧力を跳ね返し闘われます。

我々もこれらの闘いを全力で皆さんと共に継続的に支え担っていこうと思います。

救援活動の本格化に際し、再び我々の立場と呼びかけの趣旨を明らかにしたいと思います。

①レバノンの日本赤軍メンバー５名が如何なる情況に置かれても継続的に反権力・反弾圧の立場から救援活動を行います。

②レバノン関連だけでなく、日本赤軍関係者・メンバーとして弾圧を受けた人々の救援を担います。

97年２月15日早朝の一斉拘束から2000年３月17日～18日にかけた「国外退去＝強制送還」までの流れを見ると、事態が激しく動いてきたことが分かります。そもそも97年拘束後、即にチャーター機をレバノンの近隣国に派遣し、彼らの身柄を「強制送還」しようとした日本政府・外務省・公安警察の目論みは”アラブ・パレスチナの大義”に心を寄せるレバノン・アラブ・パレスチナの人々による声と行動によって打ち砕かれました。レバノン当局は結局、政治亡命を岡本さんにのみ認め、他４名を判決通り、「国外退去」にしました。現地マスコミや弁護士・国会議員、そして”岡本公三と彼の同志たちの友人の会”が指摘し抗議している様に、日本・レバノン・ヨルダン当局者の共同秘密作戦として実行された「強制送還」に至るプロセスは予測していたものの、現在の力関係では阻止することまでは出来ませんでした。

レバノンでは６日からハンストが内務省前で闘われました。日本の我々も現地の闘いに連帯しようと懸命に「送還」後の救援体制の準備に走りました。

闘いは未だ継続されています。情況は

刻々と変化しています。岡本さん亡命実現、他４名送還で事態が止まったわけではありません。これからは公判闘争であり、一つ一つの緻密で小さな積み重ねが今まで以上に問われます。レバノンでも岡本さんの身柄引渡しを巡る駆け引きは続いており、全力で現地を支えることが必要です。

また同時に上告審中の丸岡さん、第一審中の西川さん、浴田さんの救援活動も継続的に担っていきます。

皆さんのご理解とご協力を是非これまで以上に宜しくお願い致します。多くのカンパ、そしてご支援の声をお寄せ下さい。是非、皆さんの力を貸してください。お願いします。

（文責：森島）

帰国者の裁判を考える会

カンパ振込先：　郵便振替　00120-2-398834

東京都港区新橋2-8-16　石田ビル４階

救援連絡センター気付

http://www3.tky.3web.ne.jp/~sper/

E-mail: sper@tky2.3web.ne.jp

根性入れかえて、再出発です

１月27日　　浴田由起子

この原稿は、90号に掲載できなかったものです。遅れて掲載することになってしまいました。申し訳ございません。（編集係K）

2000年です。節目の年ですね。お元気ですか？暮れから、レバノンの同志達のニュースが賑やかです。今年は波瀾万丈、内憂外患いろいろありそうですが、なーに、叩かれこそ反体制です。根性入れてガンバロー！（何？どういう立場やって？ハハ、本音という立場や...）

浴田裁判も今年はいよいよ、検事側証人も出つくして、「本人」そのものが問われる段階に入ります。アー、どうすんだア！？ますます未総括が問われるウー....。

99年２月に始ったSAIKAI公判は、去る12月24日の益永証人訊問第５回を何とか行って、１月31日益永証言の「要旨公開」をもって、とりあえず一段落です。２人の同志達を公開の法廷に呼んで来ることはできませんでしたが、弁護団と浴田がしっかりと再会し、丁寧な訊問と精力的な答弁によって、深く、豊かに２人の同志の過去と今とそしっかりと語ってもらうことができました。又、不十分ではありましたが、アラブと日本の獄中で進めた東アジア反日武装闘争総括とを共通の総括と確信へと深め合う闘いの立場を進めることもできたと思っています。何よりも、22年目の再会、同志達の元気と、確信に満ちた今は、４半世紀に近い年月と、共に生き闘い続けた全ての仲間達の勝利です。ありがとう！そして今年は、この成果をさらに大きく育て、皆のものにしていけるよう新しい段階へと進みます。

さて、益永同志証人訊問第４回(12／２)、第５回(12／24)は、弁護側訊問の続きと、最後に被告人の直接訊問、検事の再主訊問でした。紙面の都合で詳しい内容は省略ですが、どうか「ゆうき凛々39号」をご覧ください。

ここでは、日本赤軍に関しての彼の考えに焦点を絞って報告しましょう。益永君は、20年近く前から、武装闘争を手段とする革

命はまちがいであるという考えにたち、最近は、「"革命"によって共産主義を目指すというふうな思想が正しいとは、まったく考えていない...今の時点では、社会民主主義が一番合理的で正しい思想と言いますか、政治的な立場だろうと考えて」います。

弁:日本赤軍についての現在のあなたの考えを聞かせてください。

利:志はよく分かる訳ですけども、日本赤軍の人たちがしてきたとされている武装闘争、つまり非合法の行動というものは誤っていたと思っています。ですから、日本赤軍は最近、武装闘争を主張していなくて、民主主義の徹底とか、憲法の擁　護ということも主張しておりますkれども、もし、それを本当に貫こうとするならば、彼らがしてきた違法行為というものは、きちんと清算した上でなければ、民衆のあるいは国民の支持が得られないし、彼らの追求しようとしてる目的も実現できないと考えています。

さらに益永君は、浴田の冒陳での「東アの闘いには、傲慢なものがあった」というのはその通りだと思うとした上で、

利:..日本赤軍のアイデンティティとしては仕方がないだろうと思うんですけど、帝国主義と闘い続けるということで、　まだ武装闘争を完全には否定していないところが読み取れたのは、まあ、残念でした。

弁:..たとえば、人民が支持しない武装闘争はしない、武装闘争は人民の要請を受けてやらなければいけないんだと、そ　ういう趣旨のことも言っているようですが？

利:一審の最終陳述の私の立場がそうだったわけですね。人民に支持されて初めて武装闘争は正当なんだと。しかし今の状　況では支持されないから武装闘争は誤りだと、こういう主張を一審ではしていました。だから、日本赤軍が今そこに辿り　着いたのかなあという気はするんですけど、それ以前の前衛主義と言いますかね、自分達が前衛になって、武装闘争をし　て革命の状況を自ら作り出していくんだというような考え方を克服したという点では、正しい方向に向かってくれている　なと思うんですけど、ただ、人民が支持すれば武装闘争をやるんだというふうに単純には言えないだろうと。と言うのは、　人民が正しい訳じゃない訳ですよね。人民ならば正しい、人民が支持すればなんでも正しいということではない。単に、　もう一歩進んで、本当に武装闘争が空に正当化されることがあるとしても、それはどういう時なのかを厳密に突き詰めて　欲しいと思いますね。

益永同志の証言を聞きながら、22年前ダッカ闘争に応えてアラブに行き、「日本共産主義運動、敗北の総括と教訓を共にし、勝利する隊伍を共に創ろう!」と、自由の地で同志達と共に進めた総括と、経験と教訓とを、まだまだ私達は、この最も近しい同志にさえも十分に報告し、共通の力へと発展させえていない。その意味で、アラブへ行ったことの責任を実践していくのは、ここからなのだということをヒシヒシと感じていました。ガンバロウ!

12／2の証言の中で益永同志は、浴田について「昔は、"革命は義"しか言わなかった。理論や権力闘争を勝ち抜く力、非合法闘争のための技術や能力があるとは、思わない...彼女は、向かないのじゃあないのか」と遠慮がちに言っていた。そこで被告人は、何がなんでもこの心配性で心やさしい証人に、22年の間に、この私がいかに「成長したか」をしっかりと示して、安心させなければとガゼン奮起したことは言うまでもない。チャンスは、被告人直接質問の時、だったのだが...。

結果はサンザンだった!今頃、益永同志は、「人は変われないものだ。しばしば後退することだってありうる...」という絶望的な気持ちになっているかもしれない...。

そんな訳で、根性入れかえて、再出発です。「やっても、やっても未総括」ですが、がんばります。どうか、懲りずに、知恵と力を貸して下さい。

前進を、共に!

1999年度『ザ・パスポート』読者アンケート結果報告

前号でお願いしました読者アンケートの結果です。アンケートにご協力していただいた皆さん、どうもありがとうございました。これからの誌面作り、会の運営方針に役立てていきたいと存じます。

今号では、3月13日までに到着した分で集計しております。それ以降の到着分は、次号ご紹介いたします。まだ出されていない方も、次号の発表にはまだ間に合うので、ぜひアンケートにご協力お願い申し上げます。5月上旬着なら掲載可能です。

☆印は、皆さんからいただいたコメントです。

（K）

集計数　20通
性別　女性8　男性11名　団体1名
平均年齢　46歳？

●これからも本誌の購読を希望しますか？

「はい」　16名
☆郵送料負担だけで許されるとすれば
☆読みたいけれど、経済的に、大変きびしい状況にあり、ご好意に甘えていていいものか？悩んでいます。

「いいえ」　4名

●本誌は読みやすいですか？

「はい」　10名
「いいえ」　0名
「どちらともいえない」　10名
☆場所による
☆読みやすいのとちょっとむつかしいのとがある。
☆自分に理解力がなく、むずかしく感じます。

●本誌の活字の大きさは適切ですか？

「大きい」　0名
「小さい」　4名（内1名「やや小さい」）
「読みやすい」　16名（内1名「小さいが読みやすい」）
☆こんなものでしょう。

●最近印象に残った記事を教えてください。

☆丸岡さんの近況を知ることが第一ながら、他の記事も、それぞれに興味深く読んでおり、どれかを挙げることは無理です。
☆個人的には社会人1年生と読者への手紙が好き。印象に残ったのは吉村さんの社会人1年生。
☆社会人1年生
☆吉村さんの社会人1年生
☆・レバノン関連記事　・社会人1年生
☆吉村さんの「社会人1年生」（子供を保育園に行かせているので）
☆丸岡氏、吉村氏の記事は毎号読みます。佐々木氏の記事は印象に残っています。
☆丸岡氏、吉村氏がいいです。
☆「解放区」はいつも楽しみです。
☆丸岡さん、浴田さん、吉村さんの個人的な文章
☆「レバノン派遣員からの現地報告」
☆特になし
☆レバノン（岡本こうぞうさん方の記事）
☆丸岡氏のレポートにはいつも楽しませて（?）もらっています。
☆すみませんみはじめたばかりで

●本誌にどのような内容を期待しますか？

☆これからも、丸岡さんたちの現在の様子や考え方を知りたい。
☆全部理解できるわけではありませんが、社会に耳をそばだてて（私の力の範囲内で）いたいと思っている私に、大いに刺激を与えてくれるザ・パスポートなので、これといって私からの要望はありません。ただ、「私たちの立場」を、より多くの人々に活動の理解をもらえるよう、front pageに置いた方がよいと思います。
☆現国家権力に対しての反発
☆より開放的な内容に
☆現場の息吹きや、書く人の生の気持ちが伝わって来る記事
☆従来通りでよいと思う
☆レバノンの獄中レポート（無理かな？）

☆私のように送ってきたから読むという興味がない訳ではないから読むというような消極的な読者の足元をひっくり返すような……なんて抽象的すぎますね。
☆極左というか赤軍の人以外にも親しめる記事内容
☆意見できる立場にないと思いますが、外の者としては、過去の闘いについてなど、仲間内では、わかっていることの解説がほしい、と思うことがあります。それ以外は、今の感じでよいと思っています。
☆現在のような内容で結構です。
☆他では入手できない情報
☆建前でない、本音の運動論・社会論。支援の人が自分をさらけだして書いて欲しい。ワープロの変換ミスをなくして欲しい。
☆すみませんみはじめたばかりで

●本会にひとことお願いします。

☆財政的にも社会状況にもしんどく苦しいこと多いと思いますが、これからもペースをくずさず頑張ってネ。共に闘いましょう！　私は活動家ではないけど応援します！　共に!!
☆丸岡君を含め署名などをもっとがんばれたら……、用紙あればまた送って下さい。
☆ますますのご活躍に期待します。年金のみの生活に入りましたので、購読の余裕がありません、申し訳ありません。
☆敬意を表します。
☆頑張って下さい
☆会の維持、発展を期待しております
☆終生続けて下さい
☆ご発展を!(広く深く、新しく、そしてぜひとも階級的に)
☆より開放的な会に
☆今までお送りいただきありがとうございました。
☆世の中の不景気と、自社の会社も不景気で私も、実質的にはリストラにあい(在職はしていますが)、関わり先にも今年1月自殺した人もあります。金持ちだけが豊かな世の中になりましたが、経済的な余裕できましたら、またお願いします。
☆ぜったいにまけないでください。ガンバってください。共にスクラムを組んで輝く未来をつかみとってください。
☆送る側は大変な労力だろうと想像します。一方、受け手の私は、多数のミニコミ誌、忙しい日常生活にうもれて、紙面をすみからすみまで読む、ということはできません。でも必ず、一応は目をとおすようにしていますので、字は多くてかまいませんから、今後もこのまま続けて下さい。
☆すみません。忙しさにかまけてあまり注意してなかったのですが、資金ぐりが大変との記述を拝見しました。がんばって下さい。
☆御好意で送って下さったところをずーっと甘えていて今まで一度しかお金を払っていない者です。これ以上は申し訳ないので、送って下さらなくて結構です。ありがとうございました。お付き合いで引き続き……とも考えましたが、「読みたい」と熱望がないのにかえって失礼と思い——。
☆レバノンの5人の救援でこれから益々忙しくなると思いますが、マイペースで運動を継続して下さい。
☆丸岡さんや、その他の人たちへの支援、がんばって下さい。お手伝いしたくとも、思うにまかせず、こんなことしか言えなくてごめんなさい。

●お礼のような編集後記のような話

アンケート調査にご協力いただいたかた、ありがとうございました。
アンケート云々などとやっている間にも、世の中の変化は早く、今度は4人の強制送還です。ということで、今号は、ベイルート5特集号になってしまいました。
日本強制送還組の今後の日程はまだはっきりしていないのですが、本誌ではなるべく早く生の声を伝えていくよう努力します。
また、P4で紹介した日本赤軍からのアピールは、すでにホームページでも紹介しているもので、『朝日』でも紹介が出ました。そのせいか、アクセス数も急激にアップしています。
まぁ、苦しいときに苦しいことが重なりますが、構えず、希望を持って、難局に臨みましょう。

(K)

会計報告
(2000.01.31 ～ 2000.03.26)

繰越（前号報告は90号参照のこと）　¥36950

収入（計¥116828）

カンパ	¥67558
購読料・会費	¥29000
パスポート売上	¥20270

支出（計¥217700）

「パスポート」印刷・発送費	¥24200
郵送料・宅配料（国内・国際）	¥11080
電話代（主に国際電話料）	¥12380
派遣費用（旅費など）	¥110040
弁護士費用	¥60000

支出の内の個人立替（渡航費用・弁護士費用）　¥170040

残金　¥106118

CONTENTS of No.91

日本赤軍４人の強制送還、岡本さんの孤立化に抗議する！　帰国者の裁判を考える会　Ｐ２
日本赤軍声明　Ｐ４
ウナディコムのみなさんへ　足立正生　Ｐ５
小さな勝利から大きな勝利へ　丸岡修　Ｐ６
拝啓「天声人語」様一英雄と「テロリスト」　丸岡修　Ｐ８
同志たちを改めて誇りに思います　浴田由紀子　Ｐ11
オリオンの輝きいまだ消えず　ワッタン　Ｐ12
社会人２年生(1)　吉村和江　Ｐ14
ＪＲＡ４名の送還劇、レバノンでは　レバノン派遣員　Ｐ17
皆さんのご協力と絶大なるカンパを！　帰国者の裁判を考える会　Ｐ19
根性いれかえて再出発です　浴田由紀子　Ｐ20
1999年度『ザ・パスポート』読者アンケート報告　K　Ｐ22

《公判日程》

◎浴田由紀子さん

４月14日、５月12日、６月６日、６月21日、７月11日
次回４／14の浴田公判は取調べ状況についての被告人質問
すべて東京地裁(地下鉄霞ヶ関駅Ａ１出口)、13時30分から

◎西川純さん

４月24日、５月23日、６月21日
すべて東京地裁、13時から

私たちの立場

(1)　日本赤軍の思想と実践から区別された、自立的地点に立脚している。

(2)　司法権力の攻撃に限らず、少数・異端の者を精神的・物理的に排除しようという方向に働く現代日本の社会状況とはあらゆる場面で対決し、これを変革するために努力する。

帰国者の裁判を考える会（SATR）
〒105-0004　東京都港区新橋2-8-16石田ビル４F
TEL 03(3591)1301　救援連絡センター気付
http://www3.tky.3web.ne.jp/~sper/index.htm
E-mail sper@tky2.3web.ne.jp
郵便振替　00120-2-398834
加入者名「帰国者の裁判を考える会」
年６回刊 定価300円 年間2000円(〒込)